



第37回日本診療放射線技師学術大会
 第23回 アジア・オーストラレーシア学術交流大会 (23rd AACRT)
 第28回 東アジア学術交流大会 (28th EACRT)



第2回

東京への道 Go To TOKYO



実行委員長 市川 重司
 (公益社団法人東京都診療放射線技師会)



技術の多様性と人の調和 / Diversity of technology and Harmony of people

1895年に放射線が発見されてから、今年で126年余り、その間の進歩は目を見張るものがあります。昨今の医療とそれを取り巻く環境は、数年前の技術が過去のものとなり、数年前に描いた構想が具現化されるなど、日々進化と変貌を遂げています。10年先は考えもつかない世界になっていることと思います。

しかし、いくら進歩しても創生するのはヒトで、管理するのはヒトではないかと思っています。

アーノルド・シュワルツェネッガーが主演を務めた『ターミネーター』という映画をご覧になった方は多いと思われます。私も各シリーズを2桁は見ました。第2作が一番好きですが（笑）。

ヒトが作りだしたコンピューターシステム（映画では「スカイネット」）が人工知能を持ち、ヒト（人類）を攻撃するというストーリーです。

映画の中のことが現実化するとは思えませんが、時代が進むに従い、コンピューターシステムの中でヒトが生活することは間違いなく、すでにその環境が到来していると言っても過言ではないでしょう。

本来「ターミネーター」という言葉の意味は、SCSI機器やバス型ネットワークなどで信号の反射を防ぐため、配線の終端に取り付ける抵抗器のことを指し、周辺機器を数珠つなぎに接続した際に、最後に取り付けることで、信号の乱れや反射を防ぐほか、ネットワークが数珠つなぎの配線となる場合の終端にも取り付けということです。映画ではここに知能を有することで、話の展開が始まるわけであります。

医療技術が多様化する中で、ターミネーターの役割を果たすのはヒトであり、ヒトとヒトの歯車が調和を生み、技術革新を後押しします。今学会!!! 何を生むか？ それを見届けるのがあなたです。コロナ禍の時代、新しい学会の在り方を模索しての開催となります。多くの方の参加をお待ちしております。

